

音楽学習における自己意識とその変容についての一考察
—教養科目「声楽入門」の授業実践を通して—

吉田 秀文

群馬大学教育実践研究 別刷
第28号 83～90頁 2011

群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター

音楽学習における自己意識とその変容についての一考察 ——教養科目「声楽入門」の授業実践を通して——

吉 田 秀 文

群馬大学教育学部音楽教育講座

A Study of a self-awareness, a consciousness and a behavior in Music Learning ——a examination of a class 'Singing Introduction'——

Hidefumi YOSHIDA

Department of Music Education, Faculty of Education, Gunma University

キーワード：音楽学習、自己意識、声楽

Keywords : Music Learning, Self-awareness, self-consciousness, Singing

(2010年10月29日受理)

1. 問題の所在

表現者が楽曲の内容や意味を理解し、自分なりの意図や解釈を加えてこれを再構築（再創造）し、パフォーマンスが思い存分に発揮できたとき、表現者は何とも言えない充実感や達成感を味わうことになろう。このような感動体験は、音楽学習における音楽表現することの喜びが大いに享受される瞬間であるといえる。また、こうした喜びに至る過程においては、主として音楽教師からのアドバイスを指示に従いながらも、最終的には表現者自身のイメージや意図を大切に決定されることが求められる。こうした一連の活動が行われた後に、表現者は自らの表現が適切であったか、自己のイメージや意図が十分に伝えられたか、活動自体の意味は何だったのか、などを振り返ることになる。とりわけ、活動を通しての自己分析、自己意識に関する確認は、今後の音楽表現方法や意欲に直接作用、影響するだけでなく、その人の生涯発達や人間形成といった事項にも関与することが考えられる。この自己を振り返ることを重要視する見方は、今日の音楽科教育が目指す課題・指針の一つである「学習の本質化」に

おいても言われていることである。そこでは、音楽の学習を、自分らしさの確認と発揮の場、自己存在証明の場として捉え直すこと、が大切であると述べられている（山本、2006）。つまり、教師から生徒への知識・技能、あるいは表現方法に関する教授だけでなく、子どもたちが自ら感じ、考えることを通して、音楽学習を行うことの意味や価値の段階にまで踏み込んで捉えることが重要になると考えられる。このことは、子どもたちの授業における指導事項の理解度や到達度だけでなく、むしろ学習活動全体のイメージや授業そのものに対する学習者の価値観を問う事項であるともいえよう。

こうした中で、梶田叡一の自己意識研究は上述した音楽科教育が抱えている今日の課題を考察する上で貢献が大いに期待できると考える。梶田は、このテーマにおける研究に長く携わっており、理論と実践から検討が多く試みられている。その理論的基盤においても心理学の主要な知見が多岐にわたって広く土台を形成しており、大いに信頼できる。また、拙稿（吉田、2009）でも触れたが、梶田は生涯の各期における自己意識の発達についても取り上げており、研究の幅広さ、

奥行きが感じられる。ゆえに本稿は、梶田の自己意識についての研究成果や知見に依拠しながら、上述したような音楽学習の今日的課題、音楽学習における自己意識とその変容について考察することにしたい。なお、本稿で取り上げる事例は筆者が行っている教養科目「声楽入門」（以下、「声楽入門」とする）である。「声楽入門」は本学のすべての学部学生を対象に開設されている教養科目で、学生が講義やレッスンを通して、選択した声楽曲一つを全受講生の前で発表（暗譜で独唱）することが課せられている。音楽を専門としない多くの学生が、緊張の中でどのように自己表現していくか、一連の学習体験を通して自己をどのように分析していくか、等が主要な目的である。また、対象が大学生ということで、梶田の青年期における自己意識の見解もあわせて考察することにする。

本稿の構成は、まず梶田の自己意識研究に関する見解を基調に、音楽学習との関連が大きいと思われる事項について取り上げ、その概要と指針について検討する。次に、そこでの指摘に沿って音楽学習への適用可能性を探り、音楽学習における自己意識の変容を検討するための理論的指針を提示する。最後に、「声楽入門」における事例を対象として比較・検討を行い、音楽学習における自己意識の変容の実際について考察する。

以上、音楽学習における学習者の自己意識変容の考察を通して、音楽学習における自己意識の作用や役割が見出され、音楽科教育における「学習の本質化」や「学習の継続化」に些少なりとも貢献できれば幸いである。

2. 自己意識研究の概要と指針

まず梶田は、その著「自己意識の心理学 第2版」（梶田、1998）において、自己意識は自らを取り巻く暗黙の前提、枠組みとなっている自己概念によっているとしている。すなわち自己概念は「一定の恒常性を持った構えであり、適当な刺激を用いることによってその大略を引き出し、客観化することが可能である。つまり自己概念は、自分自身についての意識や記憶、感情や価値づけ、等々からなる構造的ゲシュタルトであって、必ずしもそのすべてが現実の意識として現れるわけではないが、その時々自己意識をその土台において支え、枠づけているものとして考えられる」

（梶田、1998）と述べている。図1は自己概念と自己意識の構造図、図2は自己概念を構成する6つの主要素についてである。

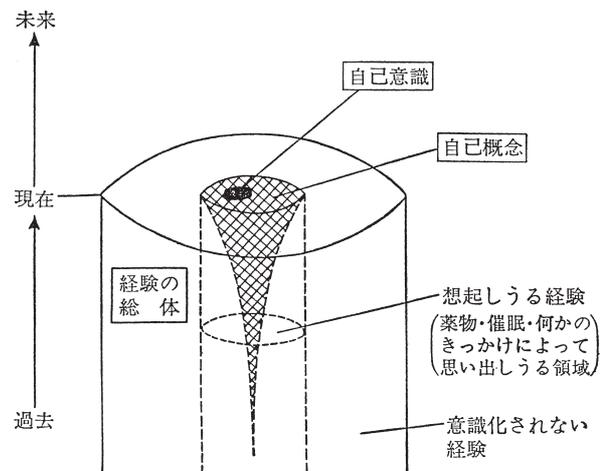


図1 経験・自己概念・自己意識
（梶田、1998年、79頁より転写）

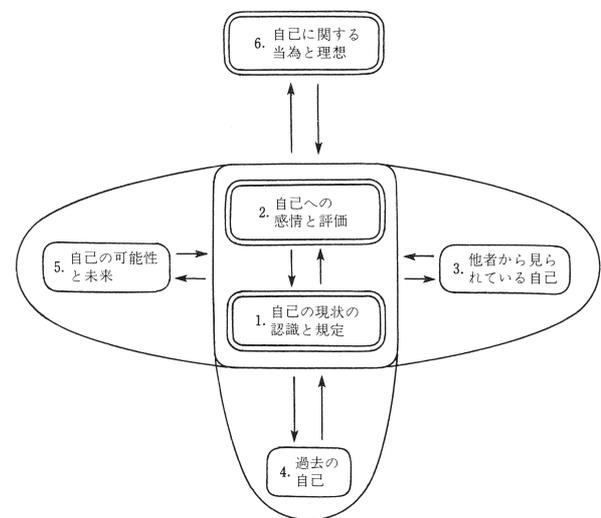


図2 自己概念を構成する主要な要素とその相互関係
（梶田、1998年、83頁より転写）

ここで示されている6つの要素（①自己の現状認識と規定 ②自己への感情と評価 ③他者から見られている自己 ④過去の自己 ⑤自己の可能性と未来 ⑥自己に関する当為と理想）は、自らを意識化する際の基本的フォルムであるとしている。

次に、青年期における自己意識において、梶田は「自我確立」の問題を指摘している。すなわち、子どもから大人への過度期（身体的、心理的、社会的）としての青年期においては、児童期にはほとんど経験してこなかった内外からの大きな圧力に直面するとしている。内部からの圧力のうち最大なものは性的衝動であり、身体的成長・成熟に伴って崩れるホルモン等の

バランスをあげ、「衝動や不安・いらだちに振り回されてしまうことなく、自らの主体的責任のもとにこれらをコントロールするということが、青年期にある者に突きつけられた大きな課題」(梶田、1998)であると述べている。外部からの圧力については、子ども時代との告别、親からの自立、年齢的自立、社会的役割の要請、などがあげられ、「外的な要請や現実に対処する方法を学び身につけていくということが、緊急な課題」としている。ところが、実際にはこの課題に直面することを避け、両親や周囲に依存したり、挫折感や無力感に苦しむ青年の実態を取り上げている。大人として今後を生きるための準拠軸の獲得について模索するのもこの頃の特徴であるが、青年期特有の傾向としてその基準や軸を見出すことはそう簡単ではない。「埋没から反抗を通して自立へ、そしてさらに自分自身へのこだわりも脱して大我覚醒へ、という内面的成長過程の全体構造」(図3)は、いわば可能態としての道筋であり、氏は現代の若者特有の課題・現象として次の3点を指摘している。以下その概要を示す。

- ①「埋没への固執」：豊かな現代日本の特徴であり、社会全体からの厳しさが減少したことに伴い、与えられた枠組みにそれほど抵抗なく感じる若者が増えた。いわゆる「良い子」として青年期を送るわけだが、子どものほうでは精神的離乳が、親のほうでは「子離れ」ができない。このような状態で「自我確立」は難しい。
- ②「反抗への固着」：「なんらかの役割を引き受けて社会に参加し、社会に貢献したいとする考え方や態度は、恥ずべき妥協である」といった考え方に寄り憑かれている状況をさす。建設的な社会参加を志向しないことは幼児的であるといえる。
- ③「反抗から埋没への退行」：一度反発、反抗はしたが、その反抗に挫折をし、「埋没」状況に立ち返ってしまう状態。

加えて梶田は、日本の特有の現象として「日本的バイパス」をあげている。これは「日本社会に根強く存在する集団主義的特質からいって、我執的方向をあくまでも追求するという姿勢には抵抗が大きく、『自我の確立』をある程度の段階で切り上げて最終的な調和の方向を早くから目指す」(梶田、1998)というものである。これまで指摘されてきた青年期特有の諸課題

および現象は、いずれも国や社会、文化、習慣など根深い側面を抱えており、青年期における「自我確立」の考察を難しくしていると考えられる。

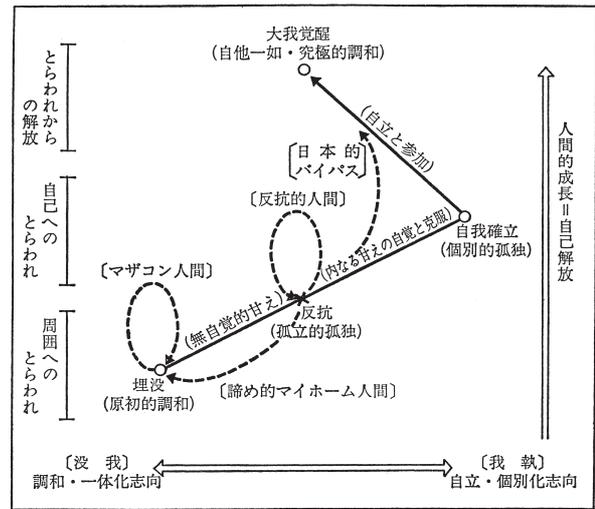


図3 人間の成長の過程と問題現象
(梶田、1998年。144頁より転写)

一方で梶田は「〈我的世界〉と実存的自己意識」について究明し、論を展開している(梶田、2008)。梶田は人間が生きる生き方の問題として二つの側面「我々の世界」「我的世界」を提示、比較して考察している。それぞれの基本的概念は表1のとおりだが、「我的世界」で生きることを深めつつ「我々の世界」を上手に生きる、ということ工夫していくこと、「我的世界」に生きるためには、自分の実感や納得や本音を大事にすること、「我的世界」に生きるとは、決して傍若無人な生き方をすることではないこと、などを指摘している。また、「我的世界」も閉ざされたものとしてではなく、開かれた形で「我的世界」を捉えることが精神的な深化向上につながり、真に「目覚め」と呼ぶものにふさわしいと述べている。図4はそうした「目覚め」と生き方のステップを示したものである。「無自覚なまま生きる」とは、没我の段階であり、自分や他人の世界のことをほとんど考えず、その場その場を欲求と必要のままに動いている状態、「〈我々の世界〉を大事に生きる」とは、自分の個人的欲求や世の中の人たちの行動、社会的に要請されている期待や価値づけ、などを必要以上に気にして動くことを指す。

また、「我々の世界」には、さらに二つの異なった方向性があり、一つ目(閉ざされた形)は「我々の世界」への受動的な埋没・流されであり、もう一つ(開

	【我々の世界】を生きる力 (現象的社会的水準)	【我的世界】を生きる力(本 質的実存的水準)
志向性	社会的位置・役割(職業・ 資格・地位・収入・名誉・ 財産)を目指し、獲得し、 生きる 世のため人のためを目指す	自分自身に固有の生を自覚 し、深め、味わい、表現し、 生きる 自分自身の充実・満足を目 指す
基本的な自己観	我々(or皆or人々)の中での 競い合い・支え合いの中の 私	自分だけの自分 一人旅を余儀なくされている 私
価値観の特徴	面子・名誉の尊重 現実的な有効性・適切性の 尊重	プライバシーの尊重 内面的な意味感・充実感の 尊重

表1 2つの世界を生きる力の育成を(ERK)
(梶田、2008年、25頁より転写)

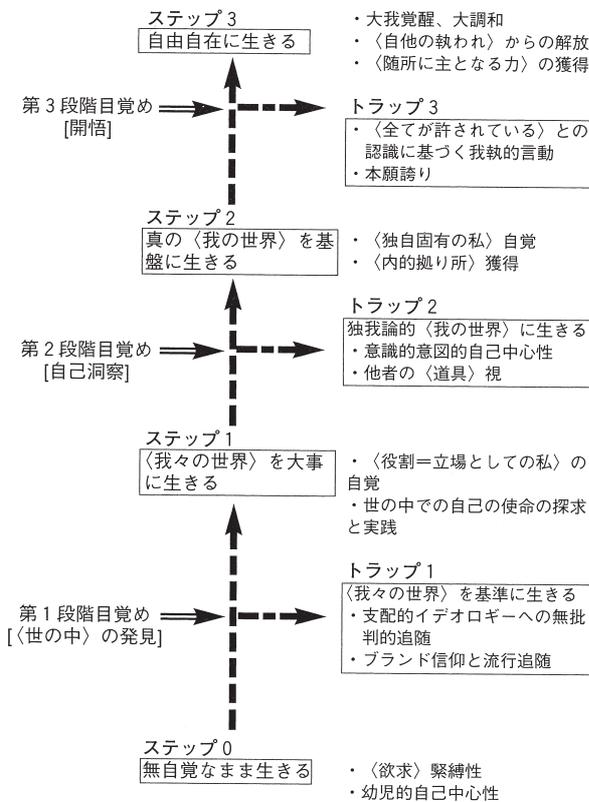


図4 生き方のステップとトラップ(ERK)
(梶田、2008年、75頁より転写)

かれた形)は「我々の世界」における自己の位置・役割・立場を自覚し、それを大事に生きようとするもの、と行動上の特徴から二分している。「真の〈我的世界〉を基盤に生きる」とは、自分自身の「我的世界」を大事にしつつ、最終的にそこに拠り所を求め、自分自身に対して誠実に生きることとするが、ここでも「閉ざされた形」「開かれた形」が存在するとしている。前者は、自分が自分だけで生きるといった孤立無援で他者とは無関係であると感じて生きること、独我的で自己中心的な生き方であり、後者は、固有独自の「私の

世界」を、私自身に与えられた世界、私自身に対して準備され他ならぬ私が生きていくべき現実、として感じ取ることであり、これは必然的に共生的で脱自己中心的な生き方に導かれるものであるとしている。さらにその上の段階として、「生かされて在る」ことの自覚、自他の区別を超えた自分自身と存在全体に対する一体感、存在そのものの全体に対する愛おしさともいえるべき感覚への目覚め(ステップ)が想定されることを示している(梶田、2008)。

以上、梶田の自己意識研究から音楽学習と関連が深いと予測される事項について取り上げてみた。梶田が指摘した知見は、現代人が抱える生き方についての根本問題を改めて捉えなおし、その実践と方向性を提唱したものとして評価できる。学校教育においても児童生徒が没我的状況に捕らわれることなく、社会の中で共生的に自らの意思を貫き、自らを誠実に生きることが求められよう。次に音楽学習における自己意識の作用、適用可能性について考察することにした。

3. 音楽学習における自己意識

音楽科教育の目指すところとして、感動体験の共有や音楽美の理解・感得が掲げられているが、これらは児童生徒の認知や感情の働きとも大きく関連することから、その実現に向けて「音楽学習における自己意識のあり方」を検討することは意味あることであり、必要なことであると考えられる。ここでは前節で取り上げた事項について、音楽学習への適用可能性を検討したい。

まず、自己意識はその人の自己概念、経験の総体によって支えられていることから、過去の音楽学習経験の如何が意味を持つことになる。音楽学習経験における様々なイメージは必ずしも直接的ではないとしても、後の学習活動を規定しかねない貴重な要素といえる。学習した楽曲の分野や様式、学習過程での様々な出来事、教師の指導パターン、評価結果、等において、できるだけポジティブなイメージを有していることが学習意欲向上の側面からも望ましいといえる。苦く辛い経験、コンクール入賞を目指した経験、プロフェッショナルな音楽家の演奏による鑑賞、等音楽学習のあらゆる学習経験が自己概念の土台となり、音楽学習の自己意識を形成することになる。

自らを意識化するための6つのフォームは、音楽学

習における自己評価を捉える指針となり、今後の音楽学習を志向するための意味付けや価値形成に作用することが考えられる。これまでの音楽学習の取り組み方、学習自体のイメージ、自らの可能性、等を客観的に振り返り、内省することは、学習の効率化が図れるだけでなく、音楽学習に取り組みながら現在を生きる自己を確認することになる。しっかりと地に足がついた学習を通して学習することの意味が見出され、これらは満足感や生きがいにつながると考えられる。

青年期における自己意識の特徴においては、自己の内外からの様々な葛藤や不安、苛立ち等からして、心理的なバランスの保持が当面の課題となる。こうした中で音楽学習を鑑みた場合、皮相的で安易な発想や短絡的ないしは衝動的な表現、等決して適切な結果とならない場合が考えられる。また、思うようにいかないことから挫折感や無力感に苛まれ、絶望感に陥ることもあるが、これらは大人として生きる準拠枠の模索と獲得にむけての重要なプロセスとして捉えることが大切である。社会から要請される準拠枠としての音楽表現については、音楽とは何か、表現とは何か、といった根本問題に発展する事項でもあるため、一概には言えないが、それぞれの音楽ジャンルにおける基本的事項に従った表現方法、いわば表現様式であると考えられる。例えば、西洋クラシック音楽における歌唱表現においては、時代（バロック、古典、ロマン派、等）、地域（イタリア、ドイツ、フランス、等）、言語（イタリア語、ドイツ語、フランス語、等）、文化（たとえばカトリックとプロテスタントといった宗教観、等）、等の違いにより、演奏様式や表現方法が少なからず異なる。音楽学習の初歩的段階では、少なからずこうした様式の獲得・学習から始めることが多いのではないかと考える。

この演奏様式や表現方法の獲得・学習は、換言すれば、「我々の世界」を意識して音楽表現することを目指すタイプといえる。これに対して「我的世界」を意識した音楽表現は、既成の準拠枠としての表現方法に固執せず、自らを偽ることなく意思を伝えることを目指すために編み出した新たな表現様式に準拠したタイプといえる。後者のタイプは意思の違いから多様なパターンが考えられる。19世紀末の西洋クラシック音楽における調性崩壊への潮流は一つの例として考えられよう。また、音楽学習に真剣に取り組むことによって、

意識していなかった新たな側面を発見したり、抱いていた思いがより深まったとする場合もある。これは音楽学習を通して自己の内面世界が広がり、「我々の世界」から「我的世界（開かれた形での）」へのステップアップが実現したことを意味すると考えられる。納得のいく自己表現だけを闇雲に求め続けるだけでなく、今そこにある課題や自己の状況を冷静に見つめ、率直に役割を果たしていくことが大切であり、それは「生かされて在る者としての自分」との出会いでもあるといえよう。そのほかにも開かれた形で「我的世界」を生きることとして、あらゆる存在に対して深い共感を持つことが示されているが、自己の準拠枠を保持しながら他の存在を認めていくことは、音楽表現の多様性に理解、共感することであり、このことを通して自己の音楽性や音楽理解がより深まるといえる。

以上、梶田の自己意識研究をベースに音楽学習の実際について検討を行った。ここで行った検討事項は、「音楽学習における自己意識をとらえるための理論的視点」として捉えることができよう。次の4点はこれを集約したものである。

- ①音楽学習における自己意識は、これまでの経験や自己概念によって形成されていること。
- ②音楽学習における自己の意識化は、6つのフォルムに従って確認できること。
- ③青年期における音楽学習は、青年期の自己意識の傾向や特徴を理解することで、より高められること。
- ④〈我的世界〉と実存的自己意識の理念に向けて、音楽学習における個の充実と共生を目指すこと。

次節では、これらの視点を基に事例の分析を行い、音楽学習における自己意識の実際について考察することにした。

4. 事例研究

梶田は、自己意識の実証的研究を進める上での基本的な視点として、次の3点をあげている。

- ①自己意識研究において、社会的相互活動と並んで、あるいはそれ以上に、自己内対話による自己意識の形成・維持・変容・深化を重視していくべきである。
- ②自己意識やアイデンティティの問題は、〈我々の世界〉（社会・世間）での意味付けからだけ研究すべきではなく、その人の独自固有の〈我的世界〉における意味付けを視点に入れて研究すべきである。

③自己内対話とか〈我的世界〉といっても必ずしもその人だけのものでなく、(具体的な社会的相互活動をも基礎付けている)共有の文化的基礎(暗黙の〈公理系〉)をア prioriに持つということを重視し、こうした基盤を考慮して検討すべきである。

音楽学習における自己意識について検討する際にもこの点を十分に踏まえることが大切といえる。ここでは、前で指摘した理論的指針に依拠して筆者が本学で担当している教養科目「声楽入門」(以下、「声楽入門」と表記)での実践事例から、その分析を試みることにする。

「声楽入門」の授業概要は以下のとおりである。なお、受講者数は28名(教育学部8、医学部14、工学部5、社会情報学部1)である。

目的：芸術としての声楽経験を通して、自己の内面を見つめ直すとともに、芸術と人間、社会の関係について深めていく。

内容：各自に与えられた声楽曲(ベッリーニ作曲「マリコニア」)を主体的に学習し、レッスンを通して楽曲の完成を目指す。授業の最後に受講生の前で暗譜で独唱の発表を行う。

評価：発表における歌唱表現、自己に関する記述式アンケート、出席、などを総合的に判断して評価する。

(a) 手続き

受講生には、授業における学習活動を通して自己を振り返るための記述式アンケートを合計3回実施した。

一回目(事前アンケート)は、梶田による「自己を意識化するための6つのフォルム」に従い、講義初日に以下の事項について回答を求めた。ここでは、①過去の歌唱学習における自己分析、②本授業を通して望むこと(理想自己)、③ピアノの演奏経験(音楽に関する知識・技能)、についての全体的な傾向を把握すること、個々の学生が抱えている声楽学習のイメージ、について明らかにすることを目的とした。

二回目(発表前アンケート)は、発表に先立ち、どのような歌唱表現で臨みたいかとする演奏計画(①発表の留意点、②楽曲のデザイン)について提出させた。これは「我々の世界」としての音楽様式を踏まえながらも、個々が独自に抱く表現世界をどのように構築したかを問うものであり、歌唱表現における「我的世界」(個々の準拠枠)へのステップアップを図るものである。

三回目(発表後アンケート)は、演奏発表終了後にこれまでの学習を振り返り、自己内対話を通して自己評価、自己分析を行った。そこでは、①自己の変容や発見、②今後の生活への生かし方、③その他、について記述を求めた。個々の演奏発表はわずか2~3分程度である。その短い時間の中で、授業で学習した声楽発声のテクニックを生かし、自分なりの歌唱表現をいかに実現していくかは、まさに意思の集中と持続に拠るところが大きいといえる。このような緊張感漂う状況の中でのプレゼンテーションにおいては、不意に想像していなかった感覚や意思の覚醒に遭遇することがある。それは、梶田が述べるところの大我覚醒、〈自他の執われ〉からの解放に向けてのステップアップといえよう。今回の演奏発表についての自己分析を通して、自分自身にとってこの一連の学習の意味は何だったのか、自己に対する新たな発見や変容は見られたか、などが明らかにされれば、音楽学習における自己意識もある程度は育成されたといっていよう。

(b) 結果と考察

〈事前アンケート〉

全体的傾向としては、これまでの学校生活における音楽教育(授業、部活動、等)で合唱経験を有する者、歌唱行為を好意的に捉える者、自らの歌唱技術について声量や声域に関する課題を感じている者、度胸がない、緊張してしまうなど精神的な弱さを指摘する者、などが比較的多く存在することが確認できた。過去のピアノ学習の有無については、28名中8名が経験ありとの回答であった。また、授業で望むことについても、「歌唱表現の向上」「声量や声域の拡張」などのテクニク的な側面、および「人前で堂々と歌える」「精神的に強くなる」などの心理的な側面、を指摘する者が多かった。

以上のことから、受講生たちは自らのこれまでの歌唱学習を振り返り、自己の認識と確認、自己の可能性やなりたい自分、などについて認識することができたといえる。また、これらの認識は受講生個々の過去における学習体験や、そこで獲得した自己概念(例えば、歌唱活動に関する固定的な感情や価値観)によって構成されていると考えられる。一例を以下のとおり示す(カッコ内は筆者による)。「高校の音楽の授業で皆の前で歌ったりしていく中で、自分の内面を表現する喜びを知りました(経験)。大きなホールでの発表では、

自分の緊張しやすさを感じさせられました（自己概念）。それと同時に、自分の心の中にある‘歌が好き’という気持ちにも気づくことができました（自己意識）。

〈発表前アンケート〉

受講生のなりたい自分（理想自己）の達成に向けて、声楽発声の基礎についての講義および個人レッスン、4人ずつのグループ学習を実施した。個人レッスンは、一人5分程度ではあるが、受講生の前で個々が歌い、指導を受けての歌唱表現がどのように変容したか、を歌っている者以外が客観的に分析することを通して行った。アンケートの結果としては、受講生のほとんどが自らの歌いたいイメージを掴むことができ、歌唱表現のデザインや留意点を記述することができた。留意点としては、「猫背にならない」「下を向かない」「下腹を意識した呼吸」「歌詞の発音」などの技能的な側面のほか、「平常心で歌う」「うまく歌おうと思わない」「冷静に歌う」などの自己意識に関する記述も見られた。特に歌唱表現においては、過剰に意識してうまく歌おうとすると、かえって身体の硬直化を招き、逆効果となってしまうことがある。平常心を心がけることは、今ここに在る自らの可能性を謙虚に受け止め、その枠の中で最大限の力を発揮することといえよう。そのためには、自分自身を客観的に分析して捉える必要があり、それは「自己のとりわれ」から「とりわれの解放」の段階で可能になると考える。以下、アンケートの記載からその一例を示す。「確かにコンサートなどでも、お客様がいてやっと演奏ができるわけである。しかし、あくまでもそれに踊らされず、平常に緊張せずにやる事が良い演奏の上では重要になってくるであろうからきをつける」。

〈発表後アンケート〉

全体的傾向としては、「以前より緊張しなくなった」「努力することで本番がうまく歌えた」とする記述が目立った。また、「何かが吹っ切れた感じを忘れずに人前でもありのままの自分を出せるようになりたい」「人の嬉しそうな顔を見られるのはとても幸せなことだと思うので、そのために自分ができることを考えながら、自分にとっても楽しいことを見つけていきたい」といった今後の生活に対する生き方についての記述もみられた。その一方で、「様々な事項を完璧にこなすのではなく、最低限自分が決めた所（呼吸と姿

勢）までを頑張ろうと割り切ったことで、うまく歌えた」と回答した者もいたが、それは「真の〈我的世界〉を生きる」上での内的拠り所がその受講生にとって大きな意味を持ったということになろう。一般的に、楽曲が自らの身体に浸透するまで練習を積み重ねることで、それが自信につながり、その結果集中して歌えることになると考える。こうした中で当初、一部の受講生のあいだでは、何となく漠然と身をおき、適当に楽しく参加していればよいとする風潮もあったが、自己を振り返ることで真剣に取り組み、事後満足のいく結果に至ったとするケースも少なからず見られた。以下、その一事例を示す。「自分自身、歌が好きであったが、自分を見つめることもほとんどなく、ただただ歌に対して漠然と向かっていた。自己分析をしたあの時、自分のことについて久しぶりに考えた。そこには‘自分自身から目を背けている’私が確かにいた。‘自分’という確かなものがないから、きっと人を引っ張る力が弱いのだらうと思った。他の人のレッスンを見て、客観的立場からも自分を見つめなおすことを覚えてからは、‘自分’というぼやけた存在の輪郭が見えるようになっていった」。ここでの記述から考えられることは、現代日本における青年期特有の一現象である「埋没への固着」に関する側面が、当該授業でも明らかになったことである。なおこの学生は、この後〈我々の世界〉への気づき（役割＝立場としての私の自覚）から〈我的世界〉へと飛躍的なステップアップを見せた。このほか、この授業の主要な目的でもある声楽発声の技能習得について記述する者も多く見られた。声楽発声のテクニックは、個々の歌唱表現を実現していくために必要な一側面であり、その習得を通して自己意識の変容も図られるものと考えられる。ここでは筆者の見解（吉田、2007、2008）に基づき、自己の解放、呼吸や姿勢の重視、などが重点的に取り扱われた。以下、事例を示す。「体操することで、こんなにも声の出し方や出せる声の高さが変わることには驚きました。そして腹式呼吸を意識することで出せる声の大きさ、高さが変わるのを実感しました。そして授業後には身体がすっきりしてすごいなあと思いました」。また、ある受講生は授業初回の段階で「自分はアルトである」と認識していたが、技能習得とともに高音が出せるようになり、ソプラノへと自己の変容が見られる結果となった。さらに別の受講生は、「自分の声楽の

可能性が広がってまだまだ伸ばせるということに気付きました」の記述から、学習意欲の高まり、すなわち、なりたい自分に対する新たなイメージに出会えたことがわかる。このことは受講生個々の弱点を指摘し、課題の解決方法を具体的に示したことで、それが自信に変わったことを意味するものであり、ここから「学習の継続化」が大いに期待できることになると言えよう。

以上、受講生のアンケートの記述内容から自己意識の変容について検討してみたが、歌唱学習において教師は、歌唱表現するための様々なヒントを学習者に示し、道筋をつけていくことが大切であり、それは歌唱表現のための準拠枠の獲得、様式感覚としての〈我々の世界〉への気づきであるといえよう。この段階での学習をまずは十分に実践し、経験を蓄積することで、〈我々の世界〉やさらにその上の段階へとステップアップが可能になると考える。そこでは、まさに歌唱表現における自己意識の変容が、積極的に実践されていることになる。

5. まとめ

本稿は、音楽学習における自己意識変容の過程を、梶田の自己意識研究を中心に音楽学習との関連を考察し、そこから音楽学習における自己意識を捉えるための理論的指針を導いた。そこでの見解を基に事例の分析を行い、音楽学習における自己意識の変容過程、メ

カニズムなどを明らかにした。しかし、本稿で提示した理論的指針は、根拠となる検討が決して十分であるとは言えず、様々な方向からの理論的考察がさらに必要であることはいうまでもない。また、本稿で取り上げた事例の対象は大学生であった。これも様々な学年の学習者や発達段階における比較などの検証が必要といえる。今後も、引き続きこうした研究に積極的に携わり、理論と実践を通して深めて参りたい。

引用・参考文献

- 梶田 叡一 「自己意識の心理学」(第2版) 東京大学出版会 1998年。
- 梶田 叡一 「自己を生きるという意識」〈我的世界〉と実存的自己意識 金子書房 2008年。
- 山本文茂 「これからの音楽教育を考える 展望と指針」音楽之友社 2006年。
- 吉田秀文 「音楽科教育における発声指導法の一考察 段階的学習プロセスの構築に向けて」群馬大学教育実践研究 第24号 165～173頁 2007年。
- 吉田秀文 「歌唱指導における教師の専門性とその育成についての一考察 声楽発声の段階的学習カリキュラムに着目して」群馬大学教科教育学研究 第6号 111～118頁 2007年。
- 吉田秀文 「音楽教育における自己意識と生涯発達に関する基礎的研究 音楽学習の継続化に向けての試論」群馬大学教育学部紀要芸術・技術・体育・生活科学編 第44巻 25～33頁 2009年。

(よしだ ひでふみ)